

オンライン日本語自律学習支援施設における実践報告
 —コロナ後の支援の在り方を考える—
 A Practical Report on an Online Japanese Language Self-Access Learning Center
 - Reflections on Post Corona Learning -

吉田好美, 寅丸真澄
 早稲田大学
 Yoshimi Yoshida, Masumi Toramaru
 Waseda University

1. 日本語自律学習支援施設の実践

本稿の目的は2点ある。まず、筆者らの所属校である早稲田大学日本語教育研究センター（以下、CJL）にある日本語自律学習支援施設「わせだ日本語サポート」のオンライン開室の実践を報告することである。次に、施設の来訪者へのインタビューを通して、コロナ後の日本語自律学習支援の意義と在り方を考えることである。

CJL には、日本語自律学習支援施設「わせだ日本語サポート」が開設されており、早稲田大学の留学生が自律的に日本語学習に取り組めるようにアドバイジングセッションを行っている。筆者らは教員として「わせだ日本語サポート」の運営に携わっている。サポート内容は主に次の5点、すなわち（1）日本語学習の方法や計画作成に関するアドバイジング、（2）文法・語彙表現・レポートの書き方・発表の仕方等に関する日本語相談、（3）日本語学習のためのテキスト・ウェブ教材やアプリ等日本語学習リソースの情報提供、（4）日本語学習に関連したセミナーやイベントの実施、（5）キャリアセンターやライティングセンター等、留学生の相談内容に応じた関係他機関への紹介である。「わせだ日本語サポート」は、これらの日本語の自律学習支援を通して、留学生の日本語能力の向上と本学およびCJLの目指す「自律的な人材の育成」に寄与することを目的としている（寅丸・吉田 2021a）。

「わせだ日本語サポート」では、2019年度まで専用室にて週3回（火・水・金）、対面でのセッションを行っていた。スタッフは大学院生で、専門は日本語教育学、政治学、理工学等多岐に渡り、日本語だけでなく、英語、中国語等多言語対応をしている。支援形態はスタッフと来訪者が1対1で行うピアサポートである。また、アドバイジングセッションのほかに、日本語学習に関連するイベントも実施している。たとえば、JLPT受験を応援する「JLPT受験支援セミナー」、日本での就職活動を希望する留学生に情報提供を行う「キャリアセミナー」、留学後の進路に悩む留学生に、スタッフや卒業生が就職活動や大学院進学への準備や心構えなどをアドバイスする「SENPAI TALK」等である（寅丸・吉田 2021a）。

しかし、2020年度はコロナ禍の中、CJLの日本語授業のオンライン化に伴い「わせだ日本語サポート」もオンラインで開室することになった。開室曜日、時間、スタッフの属性、支援形態はそれまでと同様だったが、Zoomを使用してオンラインのセッションを実施した点、およびイベントが全てオンラインでの開催

となった点が異なっていた。イベントとは「JLPT 受験支援セミナー」「ランチタイムセッション」「夜祭」といったセミナーや講演である。「ランチタイムセッション」は、スタッフが自分の専門や趣味等を生かして、日本文化、日本語文法、日本での就職活動等について話題提供し、留学生とディスカッションを行うトークセッションである。「夜祭」は、授業終了後の夜に学内外の専門家を招いて、伝統文化、敬語、発音、就職活動等、幅広い分野の話を聞く、文化と日本語学習のための講演会である（寅丸・吉田 2021b）。

2. 調査動機と目的

2019年度の対面開室時の来訪者は614名だったが、コロナ感染拡大による留学生数の減少により、2020年度のオンライン開室時の来訪者は178名に減少した。しかし、オンラインイベントの参加者数は合計414名となり、留学生がオンラインでの学びに興味や関心を持っていることが窺えた（寅丸・吉田 2021b）。

以上のような状況ではあったが、寅丸・吉田（2021b）は、オンラインでの開室により、「わせだ日本語サポート」の新たな可能性を見出せたとしている。

1点目は、オンラインセッションの可能性である。対面で開室する場合、授業やアルバイトで都合が合わない、他のキャンパスで授業があるといった留学生は来訪できなくなる。一方、オンラインで開室すれば、物理的、時間的余裕のなかった留学生にアドバイジングの機会を増やすことができる。2点目は、日本語自律学習支援を多視点から捉えた、多様なアプローチの可能性である。学習アドバイジングを核としながらも、「ランチタイムセッション」や「夜祭」といったオンラインイベントの実施により、様々な観点から留学生の自律的な日本語の学びを支えていくことができることを実感したとしている。

しかし、来訪者がオンラインで開室している施設について、実際にどのように思い、どのような感想を持っていたのか、生の声を聞くことはなかった。そこで、コロナ後の日本語自律学習支援の意義と在り方を考え、今後の施設運営やスタッフ養成に生かすことを目的として、来訪者が施設をどのような場として捉えていたか、また、施設に何を期待しているのかという点について調査を実施した。

3. 調査方法

オンライン開室時の来訪者と対面開室時の来訪者の中から、1学期に10回以上利用した来訪者（以下、リピーター）を対象とし、30分から1時間の半構造化インタビューをZoomにて実施した。質問項目は、①施設を利用したきっかけ、②施設を利用した目的、③施設を利用してよかった点、④施設に対する意見、⑤施設の活動内容に関する情報提供の方法についての5点である。インタビュー内容は録音し、文字化した。質問項目ごとにコード付けを行い、施設に対する捉え方、施設に期待する点という観点からカテゴリーに分類した。

調査対象者は、オンライン開室時の来訪者3名（ユリ、シャオ、チャン）と、対面開室時の来訪者1名（パブロ）の計4名で、全て仮名である。プロフィールは表1にまとめた。

表1 調査対象者一覧

	氏名	出身	日本語レベル
オンライン開室時の来訪者 3名	ユリ	韓国	初級後半
	シャオ	中国	上級前半 (N1 取得済)
	チャン	台湾	中級前半
対面開室時の来訪者1名	パブロ	スペイン	中級後半 (N2 取得済)

4. 結果

4.1 ①施設を利用したきっかけ・②施設を利用した目的

①の回答を表2、②の回答を表3に示す。

表2 ①施設を利用したきっかけ

	氏名	情報を得た場所	目的	理由
オンライン開室時の来訪者 3名	ユリ	学内 LMS 内の案内	会話練習	・海外に在住 ・日本語を話す機会がないので、会話練習がしたい。
	シャオ		授業の発表課題	・海外に在住 ・身近に日本語学習について質問できる人がいないので相談したい。
	チャン		授業の作文課題	・よりよい作文にするため内容や表現をチェックしてもらいたい。
対面開室時の来訪者 1名	パブロ	学内で施設を見かけた	JLPT (N2) の問題練習	・友人から日本語のサポートを受けられる場所だと聞いて、JLPT 問題集の分からない部分について質問したかった。

表3 ②施設を利用した目的

	氏名	目的
オンライン開室時の来訪者 3名	ユリ	会話練習・発音や文法に関する質問・授業の予習 敬語学習のリソースに関する情報収集
	シャオ	会話練習・授業の質問・作文チェック
	チャン	作文チェック
対面開室時の来訪者1名	パブロ	文法や語彙の質問・日本語の運用力向上

①と②の結果から、オンライン開室時の来訪者も対面開室時の来訪者も施設を、授業の予習や授業関連の質問、作文・文法・語彙・会話等における日本語運用力の向上を目的とした「言語面のアドバイスが得られる場」、また、学習リソースを収集するための「日本語学習の情報が得られる場」と捉えていることが明らかになった。

4.2 ③施設を利用してよかった点

③の回答は、以下表4のとおりとなった。

表4 ③施設を利用してよかった点

	氏名	施設を利用してよかった点	
オンライン 開室時の 来訪者 3名	ユリ	スタッフ が親切	・発音・会話・文法等、スタッフがそれぞれの得意分野を生かして対応してくれた。（発音に関する質問はスタッフ A から、会話練習ではスタッフ B から助言をもらうなど）
	シャオ		・オンラインで気軽に通える。（アクセスできる。） ・どんな相談をしてもスタッフが親身に対応してくれるので頼れる。 ・スタッフは全知全能ではないので、分からないこともあるが、分からないことがあってもスタッフと交流して一緒に調べられることが楽しい。 ・スタッフとの交流、討論によって細かい部分まで考えられ、学習が深められる。
	チャン		・母語である中国語で質問できる。 ・自分のレベルに合わせて話すスピードを調整してくれる。 ・質問したいときにパソコンで画面共有してすぐに質問ができる。 ・スタッフがすぐに答えを教えずに、自分で考える時間を与えてくれる。
対面開室時の 来訪者 1名	パブロ	・授業中にできなかった質問ができたり、独学で分からないところが聞けたりして、日本語を学習するうえで便利である。	

以上のことから、オンライン開室時の来訪者は、まず、スタッフと交流しながら調べられるという「コミュニケーションの場」、パソコンで画面共有ができる、気軽にアクセスできるといった「即時的に問題解決ができる場」、交流・討論によって学びが深められるといった「スタッフと交流し討論ができる場」、すぐに答えを教えずに考える時間を与えてくれる「自律的な学習を促してくれる場」と捉えていることがわかった。このことから、オンライン開室時の来訪者は、施設に対して学習のみならず、その他の役割も期待していることが示唆された。また、オンライン開室時の来訪者ユリは、スタッフの得意分野を生かして対応してくれること、対面開室時の来訪者パブロは、分からないところが質問できて日本語学習に便利であることを挙げており、4.1 節の質問項目①②で示したような「言語面のアドバイスが得られる場」という捉え方をしていた。

4.3 ④施設に対する意見

施設を利用して問題と感じた点、施設に対する意見を、表5に示す。

表5 ④施設に対する意見

	氏名	施設に対する意見
オンライン開室時の来訪者 3名	ユリ	・日本と時差が3時間半ある国に滞在しているため、自分が訪問したい時間帯と施設の開室時間が合わない。
	シャオ	・施設やイベントに関連した交流用のフォーラムやオープンチャットを作成してほしい。 ・(イベントの司会をしていた筆者らに対して)参加者との繋がりを生み出し、交流を活性化させる目的で、イベント時に参加者にZoomのカメラオンを促してほしい。 (オンラインという特性から、授業が終わったらその場でログアウトし、クラスメートと関係性が作れない。イベントでの出会いもその場限りになってしまい、繋がりができないことが悩みである。)
	チャン	・スタッフが他の来訪者の対応をしている間、Zoomの待機室で待たされるため、待ち時間が長いと感じる。
対面開室時の来訪者 1名	パブロ	・会話練習が目的とみられる来訪者がいた。学習以外の目的のせいで、施設の外で待たされることに疑問を感じる。

ユリは時差、チャンはZoomの待機という物理的な問題を挙げていたが、シャオの意見から、施設に期待している役割が2点明らかになった。まず、交流用のフォーラムやオープンチャットの作成を希望していることから「情報交換の場としての役割」、次に、単なるイベントへの参加だけではなく、繋がりが作れる場を希望しているということから「コミュニティとしての役割」である。

一方で、対面開室時の来訪者パブロは、学習以外の目的の来訪者に対して否定的な意見を述べており、あくまで学習目的の来訪者もいることが示唆された。

4.4 ⑤施設の活動内容に関する情報提供の方法について

施設の活動内容に関する情報提供の方法についてインタビューをしたところ、以下の表6のとおりになった。

表6 ⑤施設の活動に関する情報提供の方法

	氏名	施設の活動に関する情報提供の方法	
オンライン開室時の来訪者 3名	ユリ	特になし	
	シャオ	教員から留学生に施設の利用を促すのが確実である。	(友人に勧めたが) ・オンラインの訪問は怖いから行きたくないと言われた。 ・対面だと話しやすい雰囲気があるが、オンライン環境では話題がないと気まづくなるため、抵抗があると言われた。
	チャン	特になし	
対面開室時の来訪者 1名	パブロ	・留学前に知っていたら、施設のある大学を選択する留学生がいるのではないかと。	

施設に対する否定的な捉え方が2点見られた。まず、友人に勧めたがオンラインでの訪問が怖いといった否定的な反応が返ってきたということから、どのような留学生にも勧められる場ではなく、「留学生によって向き不向きがある場」であるという捉え方、次に、対面と異なりオンラインでのコミュニケーションには抵抗があると述べていることから「気軽に訪問しにくい場」であるという捉え方が見られた。また、教員から施設の利用を促す「教員からの働きかけ」が期待されていることが分かった。

4.5 結果のまとめ

以上のインタビュー結果から、(1) 施設に対する捉え方と、(2) 施設に期待する点について、以下の表7にまとめた。今回の調査では、対面開室時の来訪者が少なかったため、(1) (2) のいずれにおいても、対面開室時の来訪者のみに顕著な意見は得られなかった。また、オンライン開室時の来訪者と対面開室時の来訪者の共通事項も、(1) における2点に留まった。一方、オンライン開室時の来訪者からは、(1) (2) のいずれにおいても複数の意見が寄せられ、オンライン開室の有効性や留意点が示された。

表7 インタビュー結果のまとめ

オンライン開室時の来訪者/ 対面開室時の来訪者共通	オンライン開室時の来訪者
(1) 施設に対する捉え方	
①言語面のアドバイスが得られる場 ②日本語学習の情報が得られる場	①コミュニケーションの場 ②即時的に問題解決ができる場 ③スタッフと交流し討論ができる場 ④自律的に学習を促してくれる場 ⑤留学生によって向き不向きがある場 ⑥気軽に訪問しにくい場
(2) 施設に期待する点	
共通事項なし	①情報交換の場としての役割 ②コミュニティとしての役割 ③教員からの働きかけ

5. 考察

以上の調査結果から、オンラインによる自律学習支援の可能性という観点で考察を試みる。

まず、オンライン環境でも日本語自律学習支援が可能であることが明らかになった。対面開室時同様、スタッフがピアの視点から共に分からない部分について一緒に考えたり、自律的な学習を促したりすることで、来訪者がリピーターとなり、学習が深まっていく様相が明らかになった。オンライン環境でも、ピアサポートならでのコミュニケーションが可能であることが示唆された。

一方で、オンライン環境での支援は、弾力的な役割機能で対応する必要があることが示唆された。オンライン環境では、対面開室時のようなクラスメートとの

自然な人間関係構築が困難であるため、来訪者によっては、コミュニティとしての役割期待があることが分かった。対面開室時の来訪者の目的はほぼ「学習」であったが、オンライン開室時の来訪者の目的は、「学習＋交流」等「学習」以外の目的も包括されていることが分かった。日本語の自律学習支援が最優先されるべきではあるが、「学習＋交流」のように、付加的な機能も加えるなどして、臨機応変に施設の運営をしていく必要性があると考えられる。

また、施設の活動内容に関する情報提供の方法を再検討する必要性も明らかになった。対面開室時には、施設の様子を外から観察してから利用する、クラスメートの評判や感想を聞いて来訪するということが可能であったが、オンラインでは、留学生がそのような準備段階を経て来訪することができなくなった。施設の開室やイベント情報は、学内の LMS やメーリングリストで周知している。しかし、オンライン授業の実施により、メールでのやりとりの本数が急増していること、また、長時間のインターネット使用による疲労から、情報が留学生の目に触れていない可能性がある。そのため、今後はよりよい情報提供の方法を検討していきたい。

6. 今後の課題

本稿では、コロナ禍におけるオンライン環境での日本語自律学習支援の実践報告を行った。また、その実践を踏まえ、コロナ後の日本語自律学習支援の意義と在り方について検討した。2021年度秋学期もオンライン環境で日本語自律学習支援を実施する予定である。本調査の結果をふまえ、コロナ後の施設運営について具体的に検討していきたい。

参考文献

- 寅丸真澄・吉田好美 (2021a) 「『わせだ日本語サポート』の挑戦—全留学生に開かれた日本語自律学習支援を目指して—」 『早稲田日本語教育実践研究』 9, 3-10
- 寅丸真澄・吉田好美 (2021b) 「『わせだ日本語サポート』活動報告」 『早稲田日本語教育実践研究』 9, 83-89

付記

本調査は 2020 年度早稲田大学日本語教育研究センター研究プロジェクト「『わせだ日本語サポート』の利用実態と受容に関する調査研究」の成果の一部である。